

風景 (ベトナム歩道 第16回 (最終回))

著者	寺本 実
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	257
ページ	56-56
発行年	2017-02
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00048540

ベトナム歩道

連載

手元に二冊の地図帳がある。ベトナム地図出版社発行のもので、ベトナムの地方各省・中央直轄市（日本では県に相当する行政レベル）の地図を収めている。一冊は二〇〇八年三月発行、もう一冊は二〇〇九年三月発行。発行年は異なるが、同種の地図帳だ。

ただ違いが少しある。二〇〇八年三月発行のものは六四省・中央直轄市を対象としているのに対し、二〇〇九年三月発行のものは六三省・中央直轄市を対象としている。

なぜか。二〇〇八年五月〜六月の国会会期で可決されたハノイ市と関連諸省の行政区域調整に関する決議が、同年八月一日に発効したからである。同決議の発効により、ハノイ市と隣接していたハータイ省は、フートオ省に組み入れられる一部を除いてハノイ市と合併されることになった。そのため、六四から六三にベトナムの省・中央直轄市の数が減ることになったのだ。その際、ヴィンフック省、ホアビン省の一部もハノイ市の版図に組み入れられた。これにより、二〇〇八年三月版のハノイ市は面積九二二平方キロメートル、人口三〇八万七八〇〇人であるのに対し、二〇〇九年三月版のハノイ市は、面積三三四四・七平方キロメートル、人口六二二万二九〇〇人となった。そして、ハノイ市の形状は少しいびつな瓢箪型から、少しスリムなハート型に変わった。

一九九九年から二〇〇一年までの初めてのベトナム滞在時には、時代状況もあってか調査の機会がなかなか得られず、毎日ただひたすら現地所属先に通った。そこでせめて観察だけでも、ベトナム統一自転車社製の緑色で細身の自転車（約五〇万ドン）にまたがって市街地と市郊外の間をよく往復した。現在のグエン・チー！

タイン通り、チャン・ズイ・フン通り、タンロン大路のラインである。フィン・トゥック・ハン通りとグエン・チー・タイン通りが交差するポイントからトリリック川までのセクションは、初め「通り」が作られていなかった。そのため、道作りの段階から見ることになった。同セクションを抜けてトリリック川に架かる橋を渡り、少し走るともう農村だった。自身の肉体と水牛を用いて農作業に励む人達、水牛・牛の世話をする子供達がすぐに目に飛び込んでくる。街中で売るために自転車の両サイドに取り付けた籠を野菜・果実でいっぱいにして運ぶ人達、村で売る日用品を街中で買い集めて自転車で戻る人達が、道路に広がって交差する。まだ自動車の交通量も少なく、そうしたことが可能だった。その当時は国家会議センター建設予定の看板が道路沿いに立てられていただけだったが、二〇〇四年一月一日に着工され、二〇〇六年九月には竣工した。

中部では、こんなことがあった。ベトナム初の石油精製施設であるクアンガイ省のズンクアット石油精製所建設プロジェクト。同施設はベトナムが自力で建設することが一九九七年一月〜二月の国会会期で承認された。一九九八年にロシア企業の参加が決まり、越口合併企業により海岸沿いに関連施設が建設されたが、二〇〇二年に再びベトナムの単独投資によるプロジェクト遂行が決まった。しかし、二〇〇四年一月下旬に同地を訪れてみると、広大な敷地に犬を連れた少年が一人佇み、敷地にできた大きな水溜まりを水鳥たちが行き来していた。そして付近の海岸では地元の人達が釣り糸を垂れていた。

二〇〇五年五月〜六月に開かれた国会会期で

ズンクアット第一石油精製所建設の集中指導について決議が可決され、状況が変わる。同決議は二〇〇八年完成、二〇〇九年操業開始を政府に求めており、二〇〇五年一月末には建設工事が開始された。二〇〇九年一月下旬に同地を再訪すると、巨大な石油精製施設がそこにはあった。作業着を身に付けて行き来する労働者たち。その姿をフェンス越しに眺めるしかなかった。

南部のホーチミン市。二〇一四年七月、グエン・フエ通りとレー・ロイ通りの交差点では、都市鉄道の建設工事が開始された。ホーチミン市メトロ一号線はベトナム・スオイティエン間約一九・七キロメートルを結ぶ予定である。以前グエン・フエ通りは幅広の道路が交差する豪壮な作りであった。二〇一五年三月に赴任期間を終えて同市を離れる際には工事中だったが、二〇一六年四月に訪れると、同通り中央に大きな広場が誕生していた。同年二月には、かつてクリスマスのデコレーションで賑やかだった同通り沿いの商業ビルが取り壊されて更地になっていた。

至るところで変わりゆくベトナムの風景。まさしく諸行無常の感がある。

◆ ◆ ◆
 発展途上国に関する情報分析誌である本誌にあって、気楽に読め、あわよくば微笑んでいただけのコーナーにできたらと認めてきた本連載も、今回で最後となります。またどこかでお会いできればうれしく思います。長い間どうもありがとうございました。

（つらもと みのる）アジア経済研究所 東南アジアII研究グループ